

東アジア・オーストラリア地域におけるガンカモ類研究の国際協力の流れと保全への提言
～EAAFP ガンカモ類作業部会の取り組み～

牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）、Zhang Junjian、Cao Lei（RCEES, CAS）

東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ（EAAFP）は、全世界で9つあるフライウェイのうち、最も多くの渡り性水鳥の種と、最も多くの地球規模で絶滅のおそれのある種を抱えている当該フライウェイにおける、渡り性水鳥とその生息地の保全に関する国際的な枠組みである。ガンカモ類作業部会（AWG）は、EAAFPの作業計画へのサポートとアドバイスを行う9つの作業部会のひとつであり、EAAFにおけるガンカモ類の保全管理と調査研究の促進を目的とした活動を行っている。

2017年から2019年におけるAWGの作業計画では、標識・追跡調査の情報集約とコーディネート、類似種・類似亜種の識別資料の作成、ガン類・ハクチョウ類における繁殖成績評価手法の開発とモニタリング、定期的な会合・アウトリーチ・人材育成の実践、カリガネとコクガンに関するサブグループの形成と活動を優先課題としている。

ガンカモ類の標識・追跡調査に関しては、近年中国科学院を中心としたプロジェクトが進行しており、精力的な調査活動を展開している。2017年の夏にチャウン川河口において発信機を装着したコハクチョウ73羽のうち、58羽が日本国内に越冬のため飛来し、多くのバードウォッチャーの関心を惹いたことと思われる。これら追跡個体の情報は、現在解析の途上のためまだ公開はされていないが、同一の換羽地に集結した個体が越冬地では広く分散するなど、数多くの新たな知見をもたらすものと期待される。一方では、家族構成の経年変化など、追跡個体の直接観察によって得られる情報も多く、脱落した発信機の回収なども含め、今後市民科学との連携を強めていきたいと考えている。

また、EAAFにおける課題のひとつとして、渡り性水鳥の保全管理の指針となる個体数や生息地の状況把握が不十分なことがあげられる。そこで、AWGでは、今年12月に中国で開催される第10回パートナー会議（MOP10）にむけて、EAAFPがフライウェイにおける渡り性水鳥全種の個体数とその生息地の定期的な評価を主体的に実施する提言を行う準備をしている。EAAFPがエビデンスに基づいた効果的、効率的な渡り性水鳥の保全管理を実現する枠組みとなるよう、AWGとしてアドバイスとサポートを行いたいと考えている。

AWGの課題として、ボランティアな組織故にその活動に専従できる人員がおらず、まだ情報共有や活動の基盤がゆるいことがあげられる。日本国内においては、若手の育成によるガンカモ研究の底上げや国際NGOの関与などがAWGの基盤強化、ひいてはEAAFにおけるガンカモ類の保全管理の強化につながると考えられる。そのため、ガンカモ類の国際会議の開催、人材育成につながる国際ワークショップ等への参加支援、市民科学との連携による大規模な標識・追跡調査プロジェクトなど柔軟に検討し、JOGAやガンカモネットワークの協力体制のもとで実現していければと考えている。